愛知教育大学教職キャリアセンター紀要　vol.4　pp. 33 ～ 40, March, 2019

家族への期待度が母親間の人間関係構築に及ぼす影響
― 保育者養成教育における「子育て支援」「子ども家庭支援論」の基礎資料として ―

木田　千晶＊　　鈴木　裕子＊＊

＊愛知教育大学大学院生幼児教育領域
＊＊愛知教育大学幼児教育講座

How Expectations Towards Family Effect the Relationship Between Mothers
—As Fundamental Reference of “Child-care and Parenting Support” and “Family Support” for Nursery School and Kindergarten Teacher Training—

Chiaki KIDA＊　Yuko SUZUKI＊＊

Graduate student, Aichi University of Education, Kariya 448-852, Japan
Department of Early Childhood Education Aichi University of Education, Kariya 448-852, Japan

要　約

平成 30 年度改訂（定）の幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領において、保育者の職務に子育て支援に関する職務が規定された。さらに保育者養成教育においても新たな科目が設置され、保育者の専門性を活かした子育て支援への理解等が必修科目となった。保育者は、これまでの業務に加え、保護者支援、子育て支援といった幅広い技術や知識、専門性が求められるようになり、今後の保育者養成課程における学生指導についても、これまで以上の具体的な指導が必要となった。そこで、本研究では、「ママ友」という言葉に着目し、母親間の関係が構築される現状やそこから見えてくる母親たちの育児困難感を捉え、その上で、家族に対する支援の期待度が母親間の人間関係に及ぼす影響を検討した。その後、母親たちの現状を踏まえ、保育の専門家である保育者にこそできる子育て支援について考察した。その結果、「ママ友」に着目した母親たちの抱える育児困難感について、「ママ友」に頼るしかない現状が捉えられ、さらに「ママ友」との関係において、母親たちは葛藤を抱えながら関係を構築させることが示された。また、家族に対する支援の期待度の高低によって、ママ友関係構築には差異がみられ、期待度が低い母親ほど、頼れる存在が近くにないために、ママ友関係へのストレスや葛藤が強く示された。これらの結果から、保育者は、具体的な母親間の介入や直接的な助言や情報提供だけではなく、母親へ共感的な立場を示し、母親の抱える悩みや不安に寄り添うことも保育者だからこそできる支援の一つとして求められていると考えられた。

Keywords : 子育て支援、ママ友、SCAT

Ⅰ　問題と目的

平成 30 年度改訂（定）された、『幼稚園教育要領』、『保育所保育指針』、『幼保連携型認定こども園教育・保育要領』において、家庭との連携や子育て支援が幼稚園教諭、保育士（以下、保育者）の職務として規定されている。支援の内容としては、相談に応じたり、情報提供したりすることはもちろん、保護者同士の交流の機会を提供したり、保護者同士が子育てに対する新たな考えに出会い気付き合えるように工夫したりするなど、「育ちあう親」、「育ちあう親子」に対して発揮される保育者の専門性を見直す必要があり [1]、保育者の技術や知識を生かした専門的な支援が求められていることがうかがえる [2)3)4)]。

以上のような改訂（定）の背景には、社会の変化に伴い、求められる保育の質に変化があったことが考えられる。核家族化が進み、近隣とのかかわりも減る現代社会において、「ワンオペ育児」や「孤育て」といった言葉によって、母親が一人で育児を担っている現状を危惧する流れがある。女性の社会進出とともに、「イクメン」に対する期待も高まり、父親の育児参加への注目も集まる一方で、実際の取得率は 2.30％（2014 年度）にとどまっており、男性の子育てや家事に費やす時間も先進国中最低の水準である [5)]。女性や家庭の抱える育児への負担は未だに残っている現状が示唆される。このような社会状況の中で子育てをする保護者を支援する役割を、保育の専門家である保育者に求められるようになった。

これらに伴い、保育士養成課程においても、設置される科目や内容が変更され、子育て支援に関する科目では、「子ども家庭福祉」「子ども家庭支援論」「子ども家庭支援の心理学」「子育て支援」が必修科目として設置された。「子ども家庭支援論」では、支援の意義、目的、体制について保育の専門性を活かした立場からも理解することや、子育て家庭のニーズに応じた多様な支援の展開などが目標として掲げられている。また、「子育て支援」では、保育士の行う保育の専門性を背景とした保護者に対する支援を具体的に理解し、支援の方法や技術を理解することが目標として掲げられている[6]。家庭の保育を補う機能が保育所に多大に求められていることが考えられる。保育以外にも、保護者対応といった業務が色濃くなり、保育者たちの抱える負担は重くなっていることがうかがえる。そのため、保育者養成において、実際の保育の内容、技術だけではなく、保育者の専門性を活かした、保育者だからこそできる保護者対応や、子育て支援についても今後は手厚く指導していく必要があると考えられる。

そこで、本研究は以下の2点を目的とする。1点目は、周囲からの支援が少ない環境で子育てをする母親たちの抱える育児観や困難感を捉えるために、子育て中の母親たちの友人関係を表す「ママ友」という言葉に着目し、家族に対する子育てへの支援の期待度が母親間の人間関係に及ぼす影響を捉える。その際、まず、「ママ友」との関係が構築される現状を把握した上で、家族に対する支援の期待度の影響との関連を捉える。2点目は、母親たちの育児の現状を把握し、保育者養成教育における「子ども家庭支援論」「子育て支援」の基礎資料を得ることで、保育者ができる支援を考察する。

Ⅱ　母親たちの「ママ友」に対する捉え方

近年、子育て支援に対する関心が高まり、様々な支援施設が整備され、「ママ友」という言葉も新しい存在概念として社会に浸透してきた。「ママ友」とは通常の友人関係とは異なり、子どもを介しての間接的な関係がベースとなるという特徴をもつ[7]ため、互いに気を使いながら関わる関係であると考えられ、子育てにおいてサポーティブな面をもつ一方で、付き合いの難しさも伴う人間関係であるとも考えられる[8]。

子育てについての関心が高まりつつある一方、母親たちの抱える子育てに対する不安や負担は、いまだに残っている。筆者ら[9]は、母親たちの「ママ友」に対する捉え方を関係構築のプロセスの視点から検討した。第1子が幼稚園を卒園して1〜4年である30〜40代の母親7名を対象にした半構造化面接を実施し、その後、M-GTAによる分析の結果、【存在の認識】【関係の質】【関係の変化】【存在への価値観】という4つのカテゴリーが生成された。母親たちは、「ママ友」との関係においてストレスを感じる可能性があるにもかかわらず、なぜ「ママ友」を求めるかについて考察し、以下の3つのことが考えられた。

1つ目として、「ママ友」を作ることは子育てにおいて重要であり、そうしなくては親になれないという義務感があると考えられた。「ママ友」を作るという既定路線から外れないためにも「ママ友」を求めていた。

2つ目として、「ママ友」という存在から、子育てに対する不安や負担などのネガティブな感情を解消し、安心感を得ようとする意識が働くことが考えられた。現代の母親たちは、自分と同じ子育てをする母親、つまり「ママ友」という集団に身を置くことで安心感を得ようとすることが考えられた。

3つ目として、母親たちは、「ママ友」との関係を繰り返し構築し、より良い関係を望んでいた。母親にとってだけではなく、自分自身の生活も充実させたいという欲求を抱き、友人になる可能性のある存在として、「ママ友」の必要性を残していることが考えられた。

特に2つ目の、「ママ友」という存在から安心感を得ようとすることから、近くの家族に頼りきれない現状がうかがえる。「男は仕事、女は家庭」という性別役割分業の考え方に対しては、特に若い世代ほど反対する人が多くなっており、従来の固定的な役割分業を支持する意識は薄れつつある[10]ように、夫婦で育児をすることが推奨される実態も捉えられる。しかし、実際の母親たちは家族に頼りきれない思いを抱えており、今後も子育て支援、家族支援に関する検討がなされるべきであると考えられた。

Ⅲ　家族への期待度が母親間の人間関係構築に及ぼす影響

1　目的

家族に対する子育てへの支援の期待度が母親間の人間関係に及ぼす影響を捉え、子育てをする母親たちの抱える育児観や困難感を考察する。

2　方法

(1)対象：第1子が幼稚園を卒園して1〜4年である30〜40代の母親

(2)調査期間：2016年8月〜11月

(3)面接方法

同意の得られた7名に対して、半構造化面接による面接調査を行った。面接内容として、妊娠や出産以降、対象者が第1子の子育て期に経験した、他の母親たちとの関係や子育てについて自由に語ってもらった。

(4)分析方法

家族への期待度に関する語りに着目し、期待度の高い2名（期待度高群:対象者A,B)、期待度の低い2名（期待度低群:対象者C,D）を分析対象とした（表1)。本研究での家族への期待度とは、表1の語り例に示したような子育てに関する支援への期待を指す。

各対象者の語りを妊娠期、未就園期、幼稚園期、小学校期という4つの時期に分け、先行研究で得た4つのカテゴリーをもとにSCATによる分析を行った。

SCAT（Steps for Coding and Theorization）[11][12]とは、比較的小規模の質的データの分析に適しており、4ステップにより構成概念を抽出するコーディングと、構成概念を紡いで

ストーリーラインを作成する手続きを行う。さらに、それらを断片化して理論記述を行い、データから言えることを示すという分析方法である。本研究では、母親たちが、ママ友関係について何を感じ、どのようにママ友を捉え、どのように関係を構築してきたかについて、4 つの時期に分けたそれぞれの母親の自由な語りから質的に分析検討するために SCAT を用いた。4 名の対象者における 4 つの時期の語りから分析し、ストーリーライン及び作成された概念をもとに、家族の子育てへの支援に対する期待度の違いによる、母親間の人間関係構築の相違について検討した。表 2 では、作成されたストーリーラインの一部を示している。

表 1　対象者の概要と家族への期待度に関する語り例

期待度	対象者	年齢	職業	家族	面接時間	語り例
高	A	41歳	専業主婦	配偶者，子ども 2 人（9 歳女児，6 歳男児）	48 分	まあ主人ともよく話すんですけど、よそはよそうちはうち、だよね、っていうのがやっぱり根底にあるので…
	B	39歳	専業主婦	配偶者，子ども 2 人（8 歳女児，4 歳女児）	1 時間 2 分	一番はまず私は主人、一番近くにいる人だし、ああぁでもないこうでもないっていうのを今でもよく…
低	C	42歳	専業主婦	配偶者，子ども 2 人（10 歳男児，8 歳男児）義母	1 時間 8 分	旦那さんは見るタイプじゃないから…
	D	41歳	専業主婦	配偶者，子ども 2 人（7 歳女児，4 歳男児）	1 時間 19 分	（夫が）忙しい仕事でほとんどいなかったので、たぶんもう自分だけで抱え込んでいましたね。

表 2　SCAT ワークシート例（未就園期）

＜家族への期待度高群＞

発話者	テクスト	‹1›テクスト中の注目すべき語句	‹2›テクスト中の語句の言いかえ	‹3›左を説明するようなテクスト外の概念	‹4›テーマ・構成概念
A	お母さんではなかったです。まだ、えっと、自分の性格もあるんですが、あんまりそう、あの、こう、そうですね、深く仲良く付き合っているお母さん以外の方、まだ浅い付き合いの方に、トイレトレーニングまだできてないんだけどっていう話がまだなかなかできなくて、で、やはり自分の母、実母ですね、だったりとか、主人のお母さんだったり、義母ですね。の人には相談するっていう感じですね。	お母さんではなかった、深く仲良く付き合っているお母さん以外の方、まだ浅い付き合いの方、トイレトレーニングまだできてないんだけどっていう話がまだなかなかできなくて、実母、義母	他の母親には相談しなかった 関係の深さ 親密さ 浅い関係 悩み相談ができない 家族に相談する	関係の質による関係の選択 家族への信頼	相談相手の選択 家族重視
B	それはすぐに主人に、K ちゃんママって呼ばれたっていって、まあ今思うとそのあとわりと下の名前で呼び合うことが、今でも多いかも。色んな場面でもあえてみんなちょっと気を使ってなのか、ねえ、なんか一時そういう何とかママって呼ばれて私はそういう存在でしかないのかってよくそうそう、風潮じゃないけどあって、でもそれだけあってそうＫちゃんママってびっくりしてっていうのがそうママ友のちょっと印象とか、うん、あんまり児童館とか行かなかったかなっていうところがもともと自分の中ではあって。	主人にＫちゃんママって呼ばれたっていって、下の名前で呼び合う、あえてみんなちょっと気を使って、何とかママって呼ばれて私はそういう存在でしかないのかって、風潮じゃないけど、びっくりして	夫への報告 ○○ちゃんママ実体験 呼び方への意識・配慮 社会的風潮の影響	家族との共有 社会的イメージの影響	家族への報告・相談

＜家族への期待度低群＞

C	ちょうど同じ時にっていう子がたくさんいたから。結構ストレスですよね、新しい友達を作って、で、子どもも色んな子がいて、子どもがよくて親もいいっていうパターンって珍しいっていうか、どっちかが子どもはうーん嫌いだけど、親は好きなんだけどなとか色々あるから面倒くさいなって、うん。子どもがその体操をやっている間に、外で待つときにちょっと喋るお母さんみたいな。でも名前は知ってるけど、だれだれ君のママみたいな感じ、うん、で、まあ連絡先もちょっとメールは交換するけど、ま、よっぽどしないかなっていう、うん、今日休むよーぐらいな感じ、うん。	結構ストレス、新しい友達を作って、子どもがよくて親もいいっていうパターンって珍しい、親は好きなんだけどなとか、色々あるから面倒くさい、外で待つときにちょっと喋るお母さんみたいな、だれだれ君のママみたいな感じ、メールも交換するけど、今日休むよーぐらいな感じ	新たな関係構築に対するストレス 子どもと親の２つの関係性 習い事への参加 待ち時間での交流 その場だけの交流 母親としての関係 必要最低限のやりとり	ネガティブな意識 葛藤 自分の想いだけでは成立しない関係 子どものための参加 関係の選択	葛藤へのストレス 親と子の２つの関係性 当たり障りない関係
D	やっぱり見た目であるんですよね、なんかちょっと、なんだろう、富裕層の高そうな方とか、やっぱ見た目いるんですよ、わあちょっと無理だなーっていう方とかね、もともともうお兄ちゃんも入ってて、下の子も一緒っていうのがあったので、がっちりグループができてるんですよ、でちょっとやっぱり、あの、ちょっと、遠慮しがたい感じの雰囲気があって、そこに入っていくのは本当に入った途端、ああなんか違うな、大丈夫かなっていう不安はすごくあったんですけどでもちょっと頑張って。	やっぱり見た目であるんですよね、ちょっと無理だなーっていう方とか、がっちりグループができてる、遠慮しがたい感じの雰囲気があって、なんか違うな、大丈夫かなっていう不安、ちょっと頑張って	第一印象で判断、 関わりたくない相手、 入りづらい集団、 うまくやっていけるかどうか不安、 自分と違うタイプの人間、 自分なりの努力	集団への志向 人間関係への不安感 外れないための頑張り ついていくための頑張り	ママ友集団への苦手意識 既成ママ友集団からの疎外感

3 結果と考察

SCAT による分析の結果、構成概念からなるストーリーラインが記述された。ストーリーラインは 4 名の対象者それぞれの、妊娠期、未就園期、幼稚園期、小学校期という 4 つの時期によって構成される。各対象者各時期の構成概念は、妊娠期 21、未就園期 77、幼稚園期 59、小学校期 56 となっている（表 3）。以下では、4 名の対象者それぞれの、妊娠期、未就園期、幼稚園期、小学校期の 4 つの時期におけるストーリーラインを提示し、構成された概念をもとに考察する。その後、家族への期待度の高低による、「ママ友」との関係構築のされ方の共通点と相違点について述べる。なお、本文中における、□はストーリーライン、下線は構成概念を表し、「 」はインタビューデータを示している。

表 3 対象者各段階の概念数

	妊娠期	未就園期	幼稚園期	小学校期
対象者 A	3	26	11	15
対象者 B	5	17	10	14
対象者 C	3	14	24	18
対象者 D	10	20	14	9

(1) 妊娠期

1）対象者 A（期待度高群）のストーリーライン

病院内でのママ友づくりを把握していたが、里帰り出産であることを理由に、関係構築への意識的な回避をした。

2）対象者 B（期待度高群）のストーリーライン

元々の友人重視であったため、子育て経験者としての友人を先輩ママとして捉えていた。また、出産に向けた自身の心身への配慮の強さが新たな（ママ友）関係構築への意欲を喚起させない要因となっていた。

3）対象者 C（期待度低群）のストーリーライン

新たな関係構築の必要性が希薄だったため、検診への参加のみに留まり、同時期に出産を控える友人とだけ関係があった。

4）対象者 D（期待度低群）のストーリーライン

仕事仲間のことを、先輩ママとして存在の認識をするようになり、関係の継続をもたらした。一方で、新たな関係構築への苦手意識のために、閉鎖的な友好関係を続けた結果、新たな関係が生まれることはなかった。ママ友との関係構築については、好奇心と踏み出せない気持ちの葛藤や、関係へのこだわりが強くあり、関係構築に対する困難感を常に持っていた。また、家族に頼りきれない気持ちも常に抱いていた。

5）妊娠期における共通点・相違点

共通点として、妊娠期ではママ友関係構築への意識が希薄であったことが挙げられる。4 人それぞれに置かれた状況は異なるが、主に、元々の友人関係の良好さから新たな関係づくりの必要性を感じていない点、妊娠・出産への強い不安が原因となっている点が捉えられる。

妊娠期において、期待度の高低による相違点は捉えられなかったが、対象者 D のみが、妊娠期から家族に頼れない気持ちを実感しており、「一人で抱え込んでいた」と実感するほど、周囲に頼ることとができない状況での孤独な子育てを経験した。また、この時期の母親を支える存在としては、検診以外で外部の機関に頼る場面がほぼみられなかったことから、専門的な支援者よりも、家族や友人といった新たに関係を構築する必要のない身近な存在のサポートが重要であると考えられた。

(2) 未就園期

1）対象者 A（期待度高群）のストーリーライン

母子一対一の子育てへの不安を感じ、同時期に出産を控える親戚との関係を成り立たせ、さらに子育て支援センターへの参加を通して、他の母親たちを子育て仲間と認識し始める。交流の場では、楽観的な比較ができたが、育児への不安や親としての責任感を抱き始めた。しかし、家族の適度な見守りによってマイペースな子育てを続けることができ、子育て支援・検診の効果的な活用によって、安定した子育てが可能となった。子育て支援の場では、母親たちの主体性が見られ、「まあ、せっかくなら続けよう」という惰性的に継続する関係ができつつあったが、母親たちのライフスタイルの多様化や生活安定志向によって、最終的には、メンバーの減少と関係の希薄化となった。検診への参加では、子ども同士の比較する機会となり、我が子への不安を感じると同時に、他の母親との育児の比較をしてしまい、育児への焦りを感じた。不安軽減目的の相談相手の選択として、ママ友よりも家族を重視したこともあり、他の母親とは表面的で形式的な関係になっていた。

2）対象者 B（期待度高群）のストーリーライン

出産直後、近くに住む共通点のある母親との段階的な交流を経て、家族ぐるみの関係へ発展するなど、関係の深まりを経験した。ママ友への否定的イメージの影響によって、ママ友への苦手意識を抱く一方で、新たな関係への期待も抱いていた。しかし実際は、元々の友人を重視し、現状満足感もあり、ママ友関係に深い関係を求めない意識もあった。さらに、親子教室への参加によるママ友とのかかわりがイメージと一致し、積極的なママ友とのズレやママ友である自分を実感した。その後も、ママ友という言葉から受けるネガティブ感は消えることはなかったが、家族への報告・相談ができ、特に夫が緩衝的存在になったことで、ママ友関係にストレスを感じるほどにはならなかった。

3）対象者 C（期待度低群）のストーリーライン

ママ友への否定的イメージを感じながらも、プレ幼稚園への参加をする。できれば行きたくないけど子どものためにという母親としての葛藤を抱きながら参加したが、参加前に抱いていたママ友に対するイメージとの一致を感じた。内心、新たな関係への期待もあったが、イメージとの一致や、元々の友人重視、自己優先的意識が強かったためにママ友を求めず発展も望まなかった。ママ友関係では、親と子の 2 つの関係性を考えなければならず、それに伴う葛藤へのストレスを感じていた。結果的に、当たり障りのない関係を続け、共通点重視という意識の中で相手の選択を行っていた。元々の友人を重視するあまり、ママ友との関係では、作為的な壁が存在していたことを自覚している。

4）対象者Ｄ（期待度低群）のストーリーライン

親子教室への参加の有無に対して、母親としての葛藤を繰り返した結果、実際に参加することとなり、初めてのママ友を経験し始めた。表面的な関係を続ける中での交流の場の多様化に戸惑いながらも、情報交換や子ども同士の比較をしていた。比較をすることで、我が子への不安や発達に対する劣等感を感じることがある一方で、他者からの肯定的評価による安堵感も同時に得ていた。また、ママ友集団への苦手意識のために、既成ママ友集団からの疎外感を感じながらも、頼れる存在との出会いや、関係の変化による認識の変化や関係の広がりも経験した。頼れる存在とは、自身の考えとの間でアドバイスの取捨選択をしながら共通点重視を実感していた。自分が望んだ相手以外との関係については、限定的な関係、表面的で閉鎖的な関係、トラブル回避志向を重視するなど、消極的なかかわりが成り立っていた。

5）未就園期における共通点・相違点

対象者４名の共通点として、子育て支援センターや親子教室などへの自主的な参加をきっかけとしたママ友関係の開始が捉えられた。未就園期になり、子どもの将来を考えるようになることで、母親意識が強まり、新たな環境に対する意識が生まれたと考えられる。

相違点として、ママ友との関係に対する意識の違いが捉えられた。期待度高群は、ママ友とのかかわりに対する否定的印象をもちつつも、家族への報告・相談ができる環境によってママ友関係での不安や子育てに対する不安を解消することができていた。家族の適度な見守、家族を重視、家族への報告・相談、夫が緩衝的存在などの概念が示すように、期待度高群の対象者には、ママ友関係に依存しすぎなくてもよい環境が整っていたことが考えられる。さらに、その安心する環境によって、ママ友関係に対して、悩みやストレスを感じるほどのネガティブな経験には繋がらないと考えられた。一方、期待度低群は、子育てサークルやプレ幼稚園などの参加に至るまでにも母親としての葛藤が見られ、その葛藤がママ友関係構築を消極的にさせた。ママ友への否定的なイメージやママ友集団への苦手意識によって、ママ友やママ友集団への否定的印象も強く継続し、葛藤へのストレスやトラブル回避志向など、ネガティブなことから逃げるように、当たり障りのない関係を成り立たせ、相手への警戒心から作為的な壁をつくっていたことが考えられた。

対象者Ｃは、親と子の２つの関係性を考える負担や、葛藤へのストレスによってママ友関係に消極的だったことから、母親としてよりも、自分自身がどれほど楽に相手とかかわることができるかという自己優先的意識によって、自分にとって負担にならない元々の友人を重視し優先していたと考えられる。また、対象者Ｃからは、未就園期において家族の存在に対する語りは見られず、未就園期の子育てにおける家族の存在は希薄であったと考えられる。対象者Ｄは、頼る存在を欲していた様相が捉えられた。発達に対する劣等感、既成ママ友集団からの疎外感などのマイナスな感情を抱く一方で、肯定的評価による安堵感、頼れる存在など、ママ友関係が自分にとってプラスになったと実感する経験もしている。ママ友から他者評価による安堵感を得ていたことから、子育てにおいて、誰かに認められたいという欲求があったことが考えられ、それが家族ではなくママ友という存在から満たされるしかなかった状況が見られた。

期待度低群の結果から、ママ友との関係を否定的に捉えながらも、頼る存在がママ友にしかないというような現状が捉えられ、家族のサポートがない現状が対象者Ｃ,Ｄの葛藤をさらに深めたと考えられる。

(3) 幼稚園期

1）対象者Ａ（期待度高群）のストーリーライン

幼稚園入園後は、個人的な関係への抵抗感や、他の母親に対して心理的距離がありママ友に頼りきれない気持ちを抱いていたことから、他の母親たちとは、子どもを媒介とする関係、求めすぎない関係に留まっていた。しかし一方では、個人的な深い関係にならなくてもすむママ友関係の気楽さを強く感じ、それなりのママ友関係への満足感もあった。一方で、子どもの学年が上がり、継続する関係を通して、子どもを媒介とする関係から、関係の広がりや関係の深まりといった関係の変化も経験した。

2）対象者Ｂ（期待度高群）のストーリーライン

幼稚園入園後は、ママ友との関係について、気を使い合う関係から個人的な関係が成り立つまでの段階を踏んだ関係の変化を経験した。多くの母親の中から相手の選択をし、目の前の母親たちとママ友イメージとの比較、元々の友人との比較をすることを通して、共通した価値観、共通した育児観をもつ相手を理想の相手として求めるようになった。また、子どもの遊び相手にママ友関係の影響があったことも自覚している。

3）対象者Ｃ（期待度低群）のストーリーライン

入園前は、平均的な母親であることへの願望をかなえるために、ママ友づくりに対する義務感が強くあった。メディアによるママ友への否定的イメージが強くなったことで、自身のママ友関係に対しては無難な人間関係を志向した。入園後、母親としての義務感によって、クラス内でのママ友集団への受動的参加を通して、関係をスタートさせた。集団外では、生活環境の共通点があるママ友との個人的な関係も経験し、それが徐々に少数ママ友集団化に繋がった。しかし少数ママ友集団への参加に関しても、孤独感回避志向によって参加を果たしており、表面的な関係、一過性の関係に留まった。うわべだけのランチ交流や子どものための関係を維持しながら、他者の情報からママ友相関図を把握し相手の選択も行っていた。主に情報交換をする目的でかかわり、母親間のトラブルに関しては、トラブル回避志向によって、なるべくかかわらないように努めた。時間の経過とともに、ランチ交流への疲労感を感じ始め、子育てにメリットのある関係を求めるようになり、子ども同士の共通点による情報交換の目的が明確になり、自身の中で「ママ友」観が確立し始めた。一方で、居場所キープのための関係や、子どものための関係を成り立たせるために親としての葛藤をしつつも、関係の選択を意識して集団との関わりは維持させていた。

4）対象者Ｄ（期待度低群）のストーリーライン

年中からの入園となった対象者 D は、既成ママ友集団への不安を強く感じていたが、元々知るある母親が安心できる存在であったことで、不安が増すことなく園生活を開始することができた。しかし、既成ママ友集団への不安は消えることはなく、当たり障りないかかわりを続けていた。その後、ママ友集団への苦手意識が強まり、周囲に合わせるかかわりをとりながら表面的な関係を続けながらも、集団内での必要以上の情報交換による悪口や陰口などから、相手への不信感が募り、ママ友集団への苦手意識がママ友集団への拒否感へと変化し、集団関係回避志向によって、今ある関係のみでいいという現状維持志向を促進させた。トラブル回避志向のために、子どもを媒介とする関係に留まり、相手に対して作為的な壁を作る場合もあった。

5）幼稚園期における共通点・相違点

共通点として、未就園期から抱いていたママ友関係構築へのそれぞれの意識は異なるものの、それらが強固になる様子が見られた。対象者 A は、子どもを媒介とする関係、個人的な関係として、ママ友はあくまでもママ友という認識をもち、対象者 B は、段階を踏んだ関係の変化を経験し、ママ友との出会いを一つの出会いとして受け入れる認識が強くなった。一方、期待度低群の対象者 C、D は、ママ友への否定的イメージや既成ママ友集団への不安によって、ママ友関係構築へのネガティブな意識がさらに強固になり、実際の関係においても作為的な壁を作るなど、ネガティブな印象が強まっていた。

相違点としては、上記で述べたそれらの意識がもたらす、ママ友との関係づくりの志向が異なる様子が見られた。期待度高群は、ママ友関係における自分なりの理想像を築き、それを実現させようとしながらママ友との関係を成り立たせていた。例えば、対象者 A の場合、ママ友はあくまでもママ友であるという割り切った存在として受け入れることで、ママ友との適度な距離感を実現させ前向きに関係を構築させた。また対象者 B の場合は、積極的にママ友関係を経験し、「ママ友との出会いもこれまでの学生時代と同様にご縁、必要な出会い」として自分の生活に位置づけることができた。

一方、期待度低群では、ママ友集団への否定的感情が強まり、ママ友関係へのストレス回避を探るも、かかわらないこともできず、苦しみ葛藤する時期を過ごしていた。対象者 C は、ママ友づくりに対する義務感や母親としての義務感を感じ、ママ友づくりに対する意識が強まった。しかし、孤独感回避志向、居場所キープや、子どものための関係といった、自ら望んでママ友との関係を構築したというよりも、自分自身や子どもにとって、ストレスやイメージのようなトラブルにならないためにという意識のもとで、受動的に参加し、ママ友と表面的な関係を構築していたと考えられる。また、対象者 D は、「すごい気を張って」、自分がどのように立ち振る舞うのかということがママ友関係において重要な課題となり、当たり障りないかかわり、周囲に合わせるかかわりとなった。さらに、ママ友集団への抵抗感から、ママ友集団への苦手意識が強まり、最終的にママ友集団への拒否感が生まれ、否定的感情を克服できずに幼稚園期を過ごしていた。

以上のように、期待度高群と低群では精神面での安定が大きく異なり、それがママ友関係に対する必要性や生活の中での位置づけに相違をもたらしていた。未就園期から引き続き、家族の存在が影響していると考えられた。

(4) 小学校期

1）対象者 A（期待度高群）のストーリーライン

小学校入学後、幼稚園期のママ友との関係については、ライフスタイルの変化に伴い、かかわる機会・頻度の減少によって疎遠になる関係を経験した。その一方で、子ども同士の共通点や学校の情報交換の結果、深くなる関係も経験した。しかし、付き合う相手は広がらず、相手が固定化され、距離感維持志向によって、幼稚園期と同様に子どもを媒介とする関係が続いた。対象者 A 自身はこの距離感を心地よい距離感と感じており、確立した育児観や家族が第一である意識のもとでの子育てであったこが、この関係を維持させていた。母親としての義務感によってママ友集団への参加を果たしており、葛藤しつつも子どもを媒介とする関係であるという割り切りによって、ストレスを感じることなくママ友集団との関係を成り立たせていた。

2）対象者 B（期待度高群）のストーリーライン

小学校入学後は、幼稚園期のママ友との疎遠になる関係やかかわる機会・頻度の減少があった。また、新たに出会う母親とは、挨拶程度のかかわりに留まったと感じていた。その背景には、幼稚園期からの特定のママ友との関係が確立し、信頼関係重視となり、元々の家族優先志向や家族が媒介・緩衝であることが重なって、ママ友関係への志向が変化し、新たな関係構築に対して消極的になった。また新たな関係の中で、ママ友と元々の友人の違いをいっそう感じ始め、ママ友への理想を確立した上で、より意図的に相手の選択、関係の選択をするようになっていた。

3）対象者 C（期待度低群）のストーリーライン

幼稚園卒園間近から、同じ小学校に通うという子ども同士の共通点によって関係が成り立ち始め、そこでのママ友を情報交換できる存在として認識した。小学校入学後、ママ友関係の必要性について考え始め、母親たちの中で子ども同士の比較による嫉妬が生まれ始めた。比較への疲労感や嫉妬への嫌悪感が強まり、ママ友関係へのストレスを感じ、ストレス回避志向が促され、関係の選択を始めた。一方で幼稚園から継続する関係の中で、友人としての存在になったと実感できる関係もあった。開放感のある関係、自身の考えを貫ける関係といったママ友への理想が生まれ、ある対象が友人としての存在になったことを実感していた。これらの理想については、幼稚園期からの経験値による理想の変化や、ママ友集団への志向の変化も影響していると感じていた。また、家族に頼りきれないという気持ちによって、近所のママ友の必要性も捨てきれず、ご近所付き合いのための一定のかかわりは維持させていた。

4）対象者 D（期待度低群）のストーリーライン

小学校入学後は、今まで関わらなかった母親との情報交換が活発化し、不安軽減目的を達成させるために自ら積極的なかかわりを持った。一定の親密度、一定の距離感ではあるもののかかわる頻度の増加やかかわる相手の増加といった関係の広がりという関係の変化がもたらされた。

5）小学校期における共通点・相違点

共通点として、小学校入学という大きな環境の変化によって、ママ友関係においても変化があった様子が捉えられた。

しかし、変化の内容において家族への期待度によって相違が見られた。期待度高群は、幼稚園期のママ友と関係が希薄化し、疎遠になる関係も経験したが、一方で幼稚園期からの特定のママ友との関係を深めていた。小学校での新たな関係構築に関しては消極的で、その要因としては、特定のママ友の存在や、家族優先志向が考えられた。

一方で期待度低群は、幼稚園期のママ友の中から少数の特定のママ友との情報交換する程度の適当な距離をもった関係が生まれたり、小学校での新たなママ友との広く浅い関係をつくったりしていた。対象者Cは、開放感のある関係、自身の考えを貫ける関係を理想として抱き、自分にとって必要な存在としてママ友を捉えることが可能になった。また対象者Dは、関係の一定の距離感は維持しつつも、これまでの消極的なかかわりとは異なり、情報交換の活発化や不安軽減目的といった、自らの目的意識をもってママ友と積極的なかかわりを達成させていた。期待度低群の対象者 C,D は、特に、これまでの経験を経て、また、自分の環境を受け入れることで、自分が子育ての中で求める存在としてママ友を捉えたり、自分の友人になる存在としてママ友を捉えるようになったりした。子どもを介さない関係に対しても肯定的に捉え、自分にとって必要な関係としても捉えることが可能になったことが考えられる。

Ⅳ　総合考察

1　家族への期待度が母親間の人間関係構築に及ぼす影響

本研究では、「ママ友」という言葉に着目し、家族に対する子育てへの支援の期待度が母親間の人間関係に及ぼす影響を、４つの時期別に捉え考察した。その結果は以下のようにまとめられる。

妊娠期：いずれの群においても、妊娠・出産への強い不安、元々の友人関係の良好さから新たな関係づくりの必要性を感じていない点によって、家族への期待度にかかわらずママ友関係構築を強く望まない傾向が見られた。

未就園期：いずれの群の母親も、我が子の発達に対する不安が生まれ、自身の子育てへの不安が増大する時期でもあった。その中で初めてのママ友関係を経験する。家族の期待度低群の母親は、1 人で育児不安を抱え込む状況や、ママ友関係に対するネガティブ感などを打ち明けられず、ネガティブな感情を解消できる場がなく、自分一人で抱え込むしかない状況のために、実際のママ友関係構築においても、ネガティブな印象が強く残ることが示された。一方、期待度が高い対象者 A,B は、対象者 C,D と同様に、子育てに対する不安や、ママ友関係に対するネガティブ感を感じることはあるものの、家庭に帰ったときに、家族、特に夫に話をすることができる環境によって、それらの不安感が軽減され、ママ友関係に対して割り切った姿勢を維持し続けることができた。家族、特に夫の支援が、母親間の人間関係への強いストレスを感じるに至らせない影響力をもっていた。

幼稚園期：家族の期待度高群は、ママ友に対して、自分にとっての友人として必要な存在としたり、もしくはあくまでもママ友であるという割り切った存在として受け入れたりしたことで、ママ友との適度な距離感を実現させ前向きに関係を構築させていた。この背景には、家族関係の安定による精神的なゆとりが見られた。一方、期待度低群の母親は、ママ友関係に葛藤を感じたり、ストレスを感じたりしながらも、割り切ってママ友とかかわることができなかった。家族に頼れないことを背景として、ママ友とかかわることでしか不安を軽減できない状況があったと考えられる。

小学校期：期待度高群は、小学校での新たなママ友関係構築に関しては消極的で、その要因として、幼稚園期からの信頼できる特定のママ友の存在や、家族優先の志向が見られた。一方、期待度低群の母親は、子どもの成長とともに、自分自身と母親である自分を区別して友人関係を形成できるようになっていた[13]。それによって、ママ友との適度な距離感を受け入れ、自分が求める存在としてママ友とかかわることが可能になった。期待度低群の母親がママ友との関係を自分に必要なものとして認識できたことは、家族に頼りきれない状況を一定程度受容し、自身の子育てや家族関係のスタイルをある程度確立できる方向に進んだとも考えられた。

以上から、子育てをする母親にとって、家族に対する子育てへの支援の期待度が、母親間の人間関係に影響を及ぼす様子が見られた。家族、特に夫に対して支援を得にくいと感じている母親は、ママ友関係に対して、不満や不安というネガティブな感情を持っていても、うまく距離をつくれずに、抜き差しならない状況となり、ストレスを増長させている。支援が得られていると感じている母親は、同じようなネガティブな感情を抱いても、それ以上に踏み込まず、自身にとって適度な距離を維持しながら、自覚的にママ友関係を構築できる。家族、特に夫の支援は、母親自身の精神的な安定をもたらし、同時に育児不安を軽減させ、母親間の人間関係に影響を与える。山崎ら[14]は、相談相手としての家族の存在は、母親の育児不安を緩和させる可能性があると示している。家族の支援状況によって母親間の人間関係への不安が軽減され、それが育児不安をも軽減させる可能性が示唆された。

2　保育者ができる子育て支援

母親たちにとって妊娠期は、母親という意識が芽生える段階であるが、初めての妊娠・出産に対する不安や心配に対する意識が強く、新たな関係構築には意識が向かない。その後の未就園期における子育て支援などへの参加をきっかけに、「ママ友」という存在を自分の生活の中に位置づけ始めることが示された。しかし、参加に至るまでの過程で、母親は不安や葛藤を抱えたり、既成ママ友集団への疎外感を感じたりして、ネガティブな印象を感じていた。そのような母親集団

に対して居心地の悪さを感じる場面への支援として、鬼塚[15]は、グループを客観的に把握できる支援者の介入が有効であり、母親同士が共通点を共有する機会の提供等の母親同士をつなぐ介入を行うことが求められると述べている。保育者や支援者は、母親たちの関係を繋ぐことを可能とし、効果的に支援を行うことによって、母親たちを救う手立てを示すことができると考えられる。しかし、ママ友関係は、「親役割を担う自分」と「個としての自分」との葛藤が生じやすい[16]。また、子どもの存在も同時に認識されるため、母親同士の価値観や考え方が合うかどうかだけで構築できるわけではなく[17]、複雑な関係である。そのため、ママ友関係そのものへの介入については、様々な配慮が必要となることが予想され、支援方法についてはさらに検討が必要であると考える。

本研究より、家族への期待度の低い母親ほど、ママ友に頼るしかない状況が示されるとともに、ママ友関係をネガティブに捉えてしまうという結果が示された。一方で、家族への期待度の高い母親たちは、夫に報告・相談できる環境があることで、ママ友関係にストレスを感じるほどではなかった。これらの結果から、母親たちは誰かに頼りたい気持ちがあったり、話を聞いてくれる存在を求めたりしており、それらの存在があることで精神的な安定に繋がると考えられる。具体的な助言を求めるよりも前に、自分の話を聞いてほしい、知ってほしい、わかってほしいという願望があるのではないかと考えられる。このことを踏まえると、何か具体的なアドバイスをするだけが支援ではなく、母親の今の状況を理解し、不安を共有できる共感的な存在であることも重要な支援であると考えられる。また、否定的な感情だけでなく、子育てに対する肯定的な感情や、子育ての喜びを保護者と共有すること[18]も支援の一つとして考えられる。このように、母親の気持ちに共感し、寄り添える立場からの支援が求められる支援の一つとして考えられた。保育に関する専門的な知識があり、子どもの状況を理解し、家庭や子育てに近い存在である保育者だからこそできる専門的な支援であると考える。

Ⅴ　今後の課題

本研究では、専業主婦である母親を対象に調査を行った。今後は、有職である母親を対象とした同様の調査を行い、専業主婦と有職である母親の相違を明らかにすると同時に、現代の母親たちの抱える育児不安についてさらに具体的に検討していく必要がある。さらに、家族支援へと展開させるため、父親に焦点を当てた研究をも進めていく必要があると考える。

引用・参考文献

(1) 太田光洋 (2016) 子育て支援と保育. 日本保育学会 (編). 保育学講座 5　保育を支えるネットワーク―支援と連携―. 東京大学出版. 7-22

(2) 文部科学省 (2018) 幼稚園教育要領. 平成 29 年 3 月 31 日告示

(3) 厚生労働省 (2018) 保育所保育指針. 平成 29 年 3 月 31 日告示

(4) 内閣府・文部科学省・厚生労働省 (2018) 平成 29 年 3 月 31 日告示

(5) 厚生労働省 (2016) 厚生労働省白書平成 28 年度版

(6) 厚生労働省 (2018)「指定保育士養成施設の指定及び運営の基準について」の一部改正について

(7) 今井麻美 (2006) 家庭から幼稚園への移行期における子どもを持つ母親の心理的変化. 乳幼児教育学研究, 第 15 号, 97 - 105

(8) 荒牧美佐子 (2008) 幼稚園への入園前後における母親の育児感情の変化. 家庭教育研究所紀要, 30, 139 - 149

(9) 木田千晶・鈴木裕子 (2018)「ママ友」に対する母親たちの捉え方―関係が構築されるプロセスを通して―. 子育て研究 (投稿中)

(10) 前掲(5)

(11) 大谷尚 (2008) 4 ステップコーティングによる質的データ分析方法 SCAT の提案―着手しやすく小規模データにも適用可能な理論化の手続き. 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要, 第 54 巻第 2 号, 27-44

(12) 大谷尚 (2011) SCAT:Steps for coding and Theorization：明示的手続きで着手しやすく小規模データに適用可能な質的データ分析手法. 日本感性工学会論文誌, 第 10 巻第 3 号, 155-160

(13) 實川慎子・砂上史子 (2013) 母親自身の語りにみる「ママ友」関係の特徴―相手との親しさの違いに注目して―. 保育学研究, 第 51 巻, 第 1 号. 94-104

(14) 山崎さやか・篠原亮次・秋山有佳・市川香織・尾島俊之・玉腰浩司・松浦堅長・山崎喜久・山縣然太郎 (2018) 乳幼児を持つ母親の育児不安と日常の育児相談相手との関連:健やか親子 21 最終評価の全国調査より. 日本公衛誌, 第 65 巻, 第 7 号. 334-346

(15) 鬼塚史織 (2016) 乳幼児を育てる母親の子育てグループへの参加過程：母親の居場所という視点から. 発達心理学研究, 第 72 巻, 第 1 号. 10-22

(16) 前掲(13)

(17) 大嶽さと子 (2017) 子育て期における母親同士の友人グループの特徴とその関わり方との関連. 名古屋女子大学紀要, 63. 369-379

(18) 實川慎子・砂上史子 (2017) 保育者養成課程の地域子育て支援実習における学生の困難感―学生の保護者理解と保護者へのかかわりに注目して―. 千葉大学教育学部研究紀要, 第 65 巻. 327-334